

幼稚園教育における5領域の総合的な指導への一考察

—動物の世話をとおして—

片山由美 川井薫栄 高橋美知子 古橋エツ子

わが国の幼稚園教育では、生涯を通して生きる力の基礎を作るために重要な項目として文部科学省によって規定された5つの重点領域がある。これらは環境（自然とのふれあい）・健康（自分自身の健康に関する理解、自覚）・人間関係（幼稚園での生活上の人間関係）・表現（読み書きによる感情表現能力）・言葉（コミュニケーション、意思伝達能力）を意味し、これら5領域を総合的に指導する方法が議論されている。当幼稚園では、この5領域を総合的に指導するために、園児による動物の世話を実施している。本研究では、園児を参与観察（注：研究者が、一緒に行動しながら、保育者と園児の言動を観察すること）することで、5領域の総合的な指導への効果を考察した。その結果、園児の自主性、生に対する倫理観、コミュニケーション能力、衛生健康への理解能力などに、進展が見られた。また、環境と健康はとりわけ基礎的な内容を含んでおりこの2つの領域に、今後さらに重点的に取り組む必要があると考えられる。

キーワード：幼稚園教育、5領域、動物の世話、総合的指導、生命

For early childhood education in Japan, five main factors were proposed by the minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology. These are understanding of nature, health (including knowledge of sanitation), human relationships in kindergarten, communication skills and language as a tool for expressing opinion to others. Such an integral educational system is important and various strategies for implementing this are currently being discussed. To achieve effective and integral education, animal breeding was carried out in our kindergarten. In this study, we estimate the animal breeding effect on the above five areas. For this purpose we joined the group of children and observed the behavior of kindergartners who bred and cared for the animals. Our observations revealed that such animal breeding conspicuously improved the independence of the children, their understanding of ethics and sanitation, and promoted their communication skills. The results suggest that understanding nature and health issues is a key factor for early childhood education in Japan.

Key words : early childhood education, five areas, integral education, animal breeding, ethics

1 はじめに

近年、子どもを取り巻く環境は著しく変化している。とりわけ、生活を脅かす社会的・経済的な問題などが、子育て家庭における養育、教育環境としての条件を乏しくさせ、結果的に子育て家庭の養育力の低下を発生させている。それらは、少

子化、共働き世帯の増加、核家族化などによる家族機能の低下、育児不安の増加、情報化社会の進行などが複雑に絡み合い、「子どもの健全育成」に多くの課題をもたらしている¹⁾。

このようななかで、時代を担う存在として子どもたちが、家庭における養育や教育に次いで健やかな育成を育む場としての幼稚園教育は、どのような位置づけにあり、園児たちの心身への発達

にどのような効用をもたらしているのだろうか。

そもそも幼児教育の第一線機関である幼稚園は、生涯を通して生きる力の基礎を作る重要な役割を持っているといえる。幼稚園における幼児教育は、文部科学省による「幼稚園教育要領」を基本指針として実施されており、その根拠規定は、教育基本法の第11条に定められている²⁾。

ところで、幼稚園教育要領では、教育の領域として、「健康」・「人間関係」・「環境」・「言葉」・「表現」の5つが明記され、それぞれについて「ねらい及び内容」が示されている。また、「5領域」と「ねらい及び内容」との関連について、「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に発達に向かうものであること、内容は、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない」としている³⁾。

そこで、本論文では、A幼稚園において実践している園児による「動物の世話」の参与観察を素材にして各5領域との関連を考察し、幼稚園教育における5領域の総合的な指導方法について検討している⁴⁾。それは、動物を媒体とした心身への影響が、単に園児同士の交流や教諭との交流では得られない体験として園児の発達に繋がっているのではないかと想定したからである。

II 幼稚園教育要領における5領域

(図1参照)

1 幼稚園教育要領の改訂と5領域

幼稚園教育に「領域」が登場するのは、1956年に文部省（現文部科学省）から刊行された「幼稚園教育要領」からである。そこでは教育の6領域として、「健康」、「社会」、「自然」、「言語」、「音楽リズム」、「絵画制作」が示されていた。この6領域は、「発達上の特質と望ましい経験」として、領域ごとに経験するべき事柄が細かく示されていた。このため、その内容が、小学校就学前の発達課題を達成するための教育であると解釈されるなど、教育目標の設定や教育のあり方の解釈につい

ての問題点が指摘されていた。

1989年に幼稚園教育要領は改訂され、それまでの6領域から、「健康」・「人間関係」・「環境」・「言葉」・「表現」の5領域となった。

そして、各5領域の「ねらい及び内容」については、以下のように明記している。そのねらいは、「幼稚園終了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などであり、内容は、ねらいを達成するために指導する事項である」としている。また、それらを「健康」・「人間関係」・「環境」・「言葉」・「表現」の5つの領域（以下、5領域という）に分け、この5領域ごとに、その「内容とねらい」が示されている。さらに、「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に発達に向かうものであること、内容は、幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない」としている⁵⁾。

5領域を総合的に指導することの重要性は、活動内容が単独に計画され、継続性や関連性があまり考慮されなかった時代があったことへの反省からである。そのため、園児が主体性を伸ばし、主体的に言動できる教育を展開することが、今日の幼稚園教育の基本となっている。

幼稚園教育における「環境」の重要性は、学校

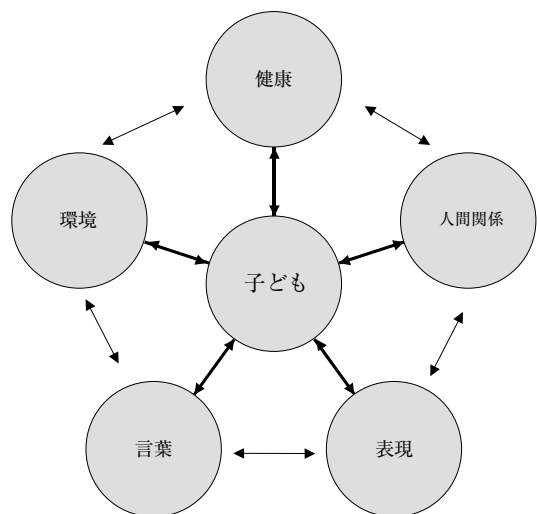


図1 園児と5領域との関係

教育法第22条において「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」と明示されている。「環境」という領域は、子どもを取り巻く人的・物的・社会的環境と位置づけられているため、その概念も範囲も広い。教諭をはじめ、園児をとりまく周囲はすべて「環境」と位置づけられる。

園児が主体的に環境とのかかわりを体験するためには、園児が自らの活動の欲求が高められるような環境設定や環境整備が必要となってくる。そのなかで、応答的環境である教諭の介在は、園児のさまざまな体験に意味を持つものとなる。この点について、渡辺は、保育者や保育者同士が作り出す園全体の雰囲気も子どもが能動性を発揮できるかどうかを大きく左右するとして、幼稚園教育者の存在や教育自体が環境であるとしている⁶⁾。

園児の幼稚園における体験は、すべからく5領域の要素が同時に存在するからである。園児の体験に対して、教諭は、①園児の体験が5領域とどのように関連しているかを認識すること、②5領域を総合的に指導することなどを念頭に置いた「教育環境を整備」する必要がある⁷⁾ (図1参照)。その前提として教諭は、園児の体験と5領域を関連づけた発想をどのように持つかも大切となってくる。このように、幼稚園教育は、幼稚園という場である「環境」を通して行われ、園児は5領域にわたって、バランスよく発達することが望まれている⁸⁾。

また、保育研究者として先駆者である倉橋は、幼児の遊びを中心とした生活体験を保育の中心に位置づけ、幼児のありのままの生活を生かしながら、そこから生じてくる主題をまず設定している。次いで、その主題に沿って系統的に編成する「誘導保育論」を提示しており、今日の教育の5領域の総合的指導につながっている⁹⁾。以下、5領域の詳細について述べる。

2 5領域におけるねらい

(1) 健康

健康については、「健康な心と体を育て、自ら

健康で安全な生活を作り出す力を養う」

としている。健康における「ねらい」は、以下の3項目である。

- ① 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
- ② 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
- ③ 健康・安全な生活に必要な習慣や態度を身に付ける。

健康の領域では、心と体の健康が密接につながっていることをふまえ、①園児が自己の充実感や存在感を実感できるようにすること、②体を動かすことを通して安全についての身構えを身に付けること、③自己の健康に関心を持って病気の予防などに必要な行動を進んで行なうことなど、以上のことが実現できるようにするのが主眼となっている。

(2) 人間関係

人間関係については、「他の人々と親しみ、支えあって生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」とされている。人間関係における「ねらい」は、以下の3項目である。

- ① 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
- ② 身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。
- ③ 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。

人間関係の領域では、園児が体験を通して抱くさまざまな感情を軸にして、①思考錯誤しながら自分の力でやり遂げる充実感をもてること、②他者とのかかわることによって自分や他者の存在を認識すること、③そのなかから道徳性の芽生えを培うことが大切となってくる。

(3) 環境

環境については、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り

入れていこうとする力を養う」としている。環境の「ねらい」は、以下の3項目である。

- ① 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中でさまざまな事象に興味や関心をもつ。
- ② 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりしそれを生活に取り入れようとする。
- ③ 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。

環境の領域では、自然やさまざまなもの触れることで、美しさや不思議さなどの豊かな感情はぐくむとともに、①物質の性質やしゅみ、成り立ちなどについて興味や関心を持つこと、②動植物に接することから生命の尊さやいたわりの気持を持つことなどが大切となる。

(4) 言葉

言葉については、「経験したことや考えたことを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する間隔や言葉に対する感覚や言葉で表現」としている。言葉の「ねらい」は、以下の3項目である。

- ① 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- ② 人の言葉や話などをよく聞き、自分の体験したことを話し、伝えあう喜びを味わう。
- ③ 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

言葉の領域では、①園児が自分の体験を言葉で表現すること、②言葉で表現することによって周囲と通い合う喜びを味わい感じること、③それらを通じた言葉そのものの発達や、言葉を使う際の基本的理解ができることなども大切である。

(5) 表現

表現については、「感じたことを自分なりに表

現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とされている。表現の「ねらい」は、以下の3項目である。

- ① いろいろなものもつ美しさなどに対する豊かな感情をもつ。
- ② 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- ③ 活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

表現の領域では、園児が体験した音、形、手触り、動きなどで気づいたことを、さらに自分なりの方法で、絵画や音楽のなかで表現する楽しさや、そのための工夫をすること、さらには、そのことによって想像力や創造力を育むことが大切となる。

ただし、留意しなければならないのは、教育要領はあくまでも指針であるため、明記されている内容は、非常に抽象的であることである。このため、抽象的な表現・内容を日々の幼稚園教育において、より具体的に検討し、考察しつつ構築していく必要がある。

この点については、教育要領第1章の「ねらい及び内容」のなかで、「なお、特に必要な場合には、各領域に示すねらいの趣旨に基づいて適切な、具体的な内容を工夫し、それを加えても差し支えない」としている。つまり、「ねらい及び内容」について具体的な表現・内容を検討し、考察しながら積み上げる必要性、また幼稚園の創意工夫が、各領域の「ねらい及び内容」をより実践的なものにすると解釈できる。すなわち、各領域をどのように関連させるかが明確になり、5領域の総合的な指導に結びついていくと考えられる。

ただし、「その場合には、それが第1章の第1に示す幼稚園教育の基本を逸脱しないように慎重に配慮する必要がある」という条件付きであることを明記しておく¹⁰⁾。

III A 幼稚園・園児による「動物の世話」の 参与観察 (図2 参照)

A 幼稚園では、ウサギ・鶏・チャボの世話をしている。そしてその世話においては、(5 領域の総合的な指導を具体化するために)、以下の要点を定めている。その要点は、園児の①自主性を育む、②生命や死の大切さを理解する、③子ども自身のもつ教育的機能が十分発揮できるようにする、④衛生管理を通して、健康に対する関心を持つという点である。

①については、具体的には、子どもの主体性を重んじて当番制にしていない。基本的には、5人1組で作業をすること、1週間ごとに交代することのみが必要要件である。

②については、動物の病気や加齢に伴う身体的なアクシデントに際しては、その処置や経過について、詳しく園児に報告することとしている。また、アクシデントが起こったからといって、園児と動物とを遮断したりせず、可能な限り観察させたり、世話を継続することを重要視している。

③については、3学期に年長児と年中児が一緒に世話をする機会を設けている。これは、年長児が次年度に世話をすることになる年中児への引き継ぎの意味がある。この場合、年長児・年中児にかかわらず最初から役割を割り当てるということをしない。引継ぎの過程では、世話の詳細を伝えると同時に、年長児が年中児のできないところをサポートすることもある。

④については、適切な消毒薬を使い、手洗いは始まり手洗いに終わる。なぜそれが必要なのか、それを怠るとどうなるかをきちんと説明し、園児自身の習慣化を目指している。また、病気の動物を観察したり世話をしたりする際には、あらかじめ教諭が動物を洗い、清潔な動物に園児が十分に触れることができるように配慮している。

IV 「動物の世話」における5領域の関連と その総合的指導

「動物の世話」と各5領域との間には、多くの関連性がある。まず、ここでは筆者たちが実際に園児たちによる動物への一連の世話を参与観察したときの場面を通して考察する。

1 園児たちの言動と5領域の関連

年少児のA君は、当番の年長児たちの世話の様子を見つめていた。そしてA君は、「大きくなったらする」と言った。たった一言であるが、この言葉には多くの意味が含まれていると考える。例えば、A君は、ウサギや鶏がきれいに掃除をした中で気持ち良さそうに過ごしている心地よさ、さらに先生やみんなが喜ぶ様子を見て、自分もそんな役割をしたい、きっとやり遂げることができると思ったのだろう。それは、A君の表情からも読み取れた。園児が、年長児が行っている動物の世話の様子に、自分の将来の姿を重ね合わせたり、自分の未来を想像したり、年長児から学ぶ姿があ

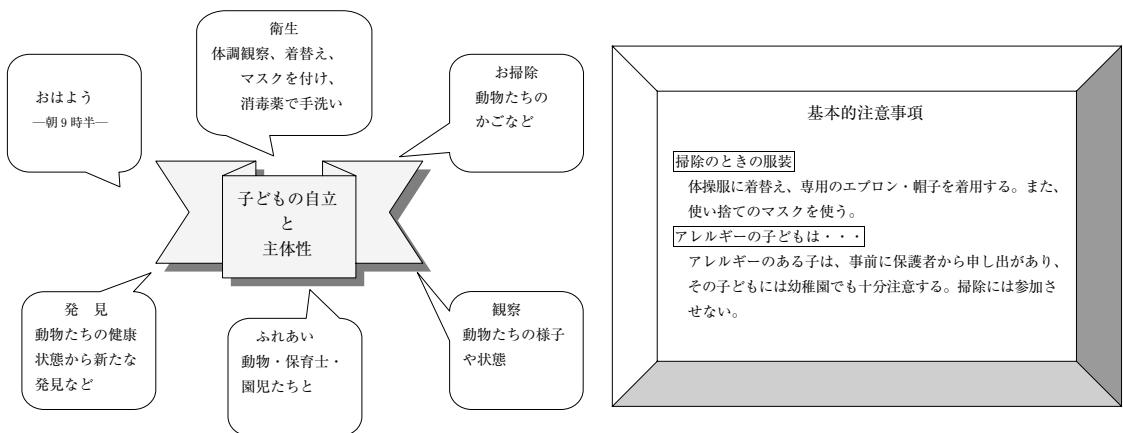


図2 園児たちによる動物の世話

る。

Bちゃんがウサギを見て、「かわいい！」と言った。そのとき、教諭が横にすぐいて、「かわいいね、触ってみる？」と促した。この場面は、園児の「触ってみたい」という気持ちをすかさず教諭がとらえて、動物に触れた瞬間の感触と感動を園児と共有しようと試みた場面である。教諭も、園児とともに世話を行なうことによって、教諭が「応答的環境」となり、動物という「環境」がより一層身近なものになっていく過程がよく現れている¹¹⁾。

これらの場面は、ほんの一部である。この短い時間のなかの出来事が、動物たちの日々の様子や変化に関心が持て、いろいろな発見や様子を誰かに話したい、伝えたいと思ったときにコミュニケーション意欲が高まり、言葉以外でも表したくなる¹²⁾。それが、画用紙いっぱい絵画や、自分の体で動物を表現することにもつながるのである。その楽しさを周囲の人々と共有し、また自然とコミュニケーションもひろがる¹³⁾。

動物の世話をする過程のなかで、主体的に動物にかかわろうとするかもしれない。そして、「動物の世話」によって、園児のなかで最初に始めた動機とはまた違う興味や関心を持ち、園児はより主体的な活動をするようになっていく。このように園児の活動は、5領域を通して切れることなく循環する。それは決して同じ循環ではなく、発展的な循環である。同時に、園児の発達課題もその循環のなかで達成することになる。

この過程において、教諭が行なう応答や環境整備などは、園児が「環境」と積極的・応答的にかかわるプロセスにおいて大変重要となる。A幼稚園における「動物の世話」に関しては、前述のように4つの要点を定めている。このことは、教育要領の「ねらい及び内容」を具体化すべく、どこにその焦点を置くかを明確にしている。これは、A幼稚園独自のものであり、「動物の世話」と5領域との関連のみならず、幼稚園教育がその目的のひとつである「生きる力の基礎を作る」ことにつながっていると思われる¹⁴⁾。

以下で、A幼稚園における動物の世話をとおして具体化するための4つの要点と5領域との関連

性を検討する。

2 A幼稚園における4つの要点と5領域との関連

①の「自主性を育くむ」については、幼稚園教育要領にあるとおりであった。

要点の②である「生命や死の大切さを理解する」ために、動物が病気になっても園児が世話を続けることによって、園児が持つさまざまな感情を抱くことを全て受け止め、教え、導いている。園児からは、実際に「どうしてこんなになったの?」とか、「これからどうなるの?」、「かわいそうやからやさしくしてあげないといけないね」などの言葉が聞かれた。園児たちは、年齢を重ねるということはどういうことなのか、病気になったらどのような世話が必要でどのような気持ちをも自分たちが持つのか、また生き物のもつ生命力の強さや弱さなどを実際の体験で身をもって知る機会になっており、大変貴重な経験となる¹⁵⁾。

園児が動物の世話をするなかで、産みだての卵が温かなことや生きている動物の温かさや死んだ動物の冷たさを肌で感じたり、弱って自力で動けない動物を自分の手で触れて世話をしたりすることは、今日なかなかできない体験であろう。A幼稚園では病気で死に至った動物の弔いを幼稚園で行うようにしている。つまり、「生から死」という過程を全てにわたって経験させている。生きていること、また死んだらどうなるのかという実体験から、生きることや死ぬことの意味を園児なりに考える機会となる。このことは将来、人間が生きて死に至る過程や、その過程で何が必要なのかを考え、生の大切さを考える基礎につながるのではないか。まさに、幼稚園教育の大きな役割のひとつである「生きる力の基礎を作る」ことと言えるのではないだろうか¹⁶⁾。

また、③の「子ども自身のもつ教育的機能が十分発揮できるようにする」については、当番性をとらないことや、年長・年中にかかわらず世話の内容を決めていないことから、動物の世話のできる範囲やできない範囲を園児自身で考える機会をつくり、かつ、自然発生的にやりたい役割を発揮できることを大事にしている。そこには、年長児

が年中児・年少児のサポートをするといういたわりの気持ちや、年齢の違いによる可能な範囲に対する責任感や助けてもらったという感謝の気持ちがある。こうした一連の行動をとおして、園児は人間関係のなかで、自分の考えや他者の考えを聞き、皆で協力しあいながら他者と生きることを体験する。

さらに、④の「衛生管理を通して、健康に対する関心をもつ」ことについては、教諭の準備が時間と手間をかけて行われている。教諭によって、園児のその日の体調観察、服装準備の段階から正しい着用のチェック、手洗いなどが厳重に確認されている。また、病気の動物の世話は、園児ではなく教諭が行っており、病気の動物をシャワーする際は非常に時間と手間がかけられている。そして、教諭が病気の動物を衛生面に注意しながら世話をを行うことを園児が見ることによって、健康やそれを守ることへの関心が生まれている。

これらは、教育要領第2章「ねらい及び内容」で示されている「各領域に示すねらいの趣旨に基づいて適切な、具体的な内容を工夫し、それを加えても差し支えない」という点にあたる。つまり、各幼稚園において、「ねらい及び内容」について検討された具体的な表現・内容であり、本幼稚園独自の創意工夫である。このことが、まさに各領域の「ねらい及び内容」をより実践的なものにし、各領域の関連性が明確になる。そして、5領域の総合的な指導に結びついていくと考えられる。

V おわりに—5領域における総合的指導を実施する際の視点

A幼稚園において、5領域の総合的指導を一層確実なものにしているのは、①園児の自主性をはぐくむこと、②園児が生命や死の大切さを理解すること、③子ども自身のもつ教育的機能が十分発揮できるようにすること、④衛生管理を通して、健康に対する関心を持つことなど明確な視点を定めて、「動物の世話」を行なっているからである。つまり、「動物の飼育」ではなく、「動物の世話」という視点で、園児の発達を念頭に置いた園児の主体的活動と位置づけていることが、5領域の総



図3 5領域の総合的指導における各領域の関連図

合的指導をより確実なものにしている。加えて、動物の世話において、「園児の安全衛生が第一に確保されること」は最も保障されなくてはならない点である。この点A幼稚園では、園児のアレルギーの有無の確認をあらかじめ行なっておくこと、その日の体調観察、服装準備や手洗い指導と確認など、動物を媒介とする感染の防止対策をきちんと行なうことが大変重要であり、最低限の条件であると認識し、実施していた。

5領域の総合的指導においては、環境を通して、まず園児の自主的な活動や体験をいかに引き出すかが基本となる。さらに、実際の体験をとおして、安全衛生という「健康」の領域を確保しながら、いかに5領域内で循環させて、発展的思考を持たせるかが鍵となる（図3参照）。

なお今回、筆者たちは、参与観察であったため、事実から考察したことにとどまっている。今後は、A幼稚園での「動物の世話」と5領域における教諭の総合的な指導に際しての実際の声を聴取し、園児の環境と健康をさらなる研究課題として取り組んでいきたい。

注

- 1) 待井和江(1995)『保育原理・第3版』現代の保育学4、ミネルヴァ書房、8頁によると、待井は、急激な都市化による遊び場や遊び仲間が喪失していることや受験戦争や能力主義などの教育のゆがみのほか、子どもを当て込んだ企業の商業などが子どもから遊びの機会を奪いつつあることも指摘している。この意味で、幼稚

園教育における子どもが「遊び」を通して学ぶことは大変重要といえる。

- 2) 教育基本法解説第11条では、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることにかんがみ、国及び地方公共団体は、幼児の健やかな成長に資する良好な環境の整備その他適当な方法によって、その振興に努めなければならない」とされている。
- 3) 石山哲郎・鶴見達也編 (2008)『平成20年告示 幼稚園教育要領・保育所保育指針〈原本〉』チャイルド本社、5-25頁参照。
- 4) 倫理的配慮としては、まず園児に「一緒に動物の世話をさせてほしい」旨を伝えて理解を得た。また、普段行っている園児の動物の世話をそのまま観察できるようにするため、園児に「どのように行なうのか教えてほしい」という言葉かけからはじめて、参与観察者が自然にそのなかに入るように心がけた。
- 5) 前掲注3、9頁参照。
- 6) 森上史朗・大豆生田啓友 (2007)『よくわかる保育原理』やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ、ミネルヴァ書房、103頁参照。
- 7) 中沢和子・小川博久 (2001)『保育内容・環境〔第2版〕』建帛社、1-3頁参照
- 8) 前掲注1、186頁によると、待井は「乳幼児の教育とは、端的に生活の保育であり、子どもの具体的な生活経験を出発点とし、生活の充実をめざすものである」としている。子どもの発達の特徴として、心身の機能が十分に分化していないことがある。このため、乳幼児の教育や保育は、発達が心身の両側面にわたって総合的・多面的に推進される時期であることを基本として評価されるべきであるとしている。
- 9) 高月教恵 (2001)「倉橋誘導保育論の実際：菊野ふじの『人形の家を中心にして』の実践記録をとおして」新見公立短期大学紀要、31-41頁によると、倉橋惣三は、フレーベルの影響を深く受け、子どもが自発的に活動し、それにかかわる保育者（教育者）がその活動を助け、さまざまな方向に誘導する「誘導保育」を中心とした保育論を提唱している。
- 10) 前掲注3、5-6頁参照。
- 11) 古市久子・廣本ゆかり (2003)「動物飼育における子どもの生態学的視点について」大阪教育大学幼児教育研究所、25-26頁によると、古市らの調査では、教師の動物飼育において、その目的を「命について学ばせる」、「心を育てる」と回答している者が回答者全体の約4割を占めていた。また、動物飼育を意識した保育で実践しているなかで特に配慮している点については、「興味付けをする」、「心の育ちを期待する」、「命に関する教育をする」、「世話をする」、「飼育方法を教える」、「表

現する」などの回答があったとされている。

- 12) 小田 豊・芦田 宏・門田理世 (2004)『保育内容・言葉』保育の内容・方法を知る、北大路書房、29-36頁参照。
- 13) 中川信子 (2006)『ことばをはぐくむ－発達に遅れのある子どもたちのために』ぶどう社。中川は、「ことばは人と人のかかわり合いの中で育つ」と述べている。楽しいことを先生や友達と共有したいと思うからこそ言葉が増えコミュニケーションがひろがるのである。
- 13) 環境による保育が、幼稚園教育の基本であるという思想は、1948年の教育基本法の制定で、同法7条に条文文化されている。
- 15) 中沢和子・小川博久 (2001)『保育内容・環境〔第2版〕』建帛社、72-73頁参照。
- 16) 小倉 薫 (2004)「幼児期における自然との関わりから得る心の育ちに関する研究：小動物（アゲハの生態）を通して」、日本保育学会大会研究論文集、438-439頁によると、小倉は、小動物を捕獲するだけでなく、それを自ら育てるという経験を積み重ねた結果、生き物の誕生や死を通して生命の畏敬の念の心の育ちに変化が現れたとしている。

参考文献

- ・保育士養成講座編纂委員会編 (2007)『保育原理』改訂3版・保育士要請講座・第7巻、全国社会福祉協議会。
- ・長谷川真人・神戸賢次・小川英彦 (2002)『子どもの援助と子育て支援—児童福祉の事例研究』ミネルヴァ書房。
- ・井上共子 (1999)『言葉〈理論編〉』三見書房。
- ・石山哲郎・鶴見達也編 (2008)『平成20年告示 幼稚園教育要領・保育所保育指針〈原本〉』チャイルド本社。
- ・菊池秀範・石井美晴編 (2001)『こどもと健康』新保育内容シリーズ〈改訂〉萌文書林。
- ・神田英雄 (2005)『3歳から6歳—保育・子育てと発達研究をむすぶ〈幼児編〉』ちいさいなかま社、ひとなる書房。
- ・新平鎮博編 (2002)『保育・教育のための小児保健』光生館。
- ・無藤 隆・岡本祐子・大坪治彦 (2005)『よくわかる発達心理学』やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ、ミネルヴァ書房。
- ・待井和江 (1995)『保育原理・第3版』現代の保育学4、ミネルヴァ書房。
- ・森上史朗・大豆生田啓友 (2007)『よくわかる保育原理』やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ、ミネルヴァ書房。
- ・三上利秋 (2006)『児童文化』保育出版社。
- ・中川信子 (2006)『ことばをはぐくむ－発達に遅れのある

- 子どもたちのために』ぶどう社。
- ・中沢和子・小川博久（2001）『保育内容・環境〔第2版〕』建帛社。
 - ・乳児保育研究会編（2002）『乳児の保育新時代』改訂版資料でわかる、ひとなる書房。
 - ・大場幸夫・民秋 言（2002）『子どもと人間関係—人とのかかわりの育ち』新保育内容シリーズ〈改訂〉、萌文書林。
 - ・岡 佐智子編（2001）『新編・小児栄養—理論・応用・実習』相川書房。
 - ・小田 豊・芦田 宏・門田理世（2007）『保育内容・言葉』保育の内容・方法を知る 北大路書房。
 - ・柴崎正行・戸田雅美（2002）『教育課程・保育計画総論』新・保育講座⑤、ミネルヴァ書房。
 - ・諏訪きぬ（2003）『現代保育学入門—子どもの発達と保育の原理を理解するために』、フレーベル館。
 - ・心理科学研究会編（2002）『育ちあう乳幼児心理学—21世紀に保育実践とともに歩む』有斐閣。
 - ・宍戸洋子・亀谷和史（1996）『5歳・知りたい意欲を育ちのバネに—考え合う子どもたちとともに』年齢別保育実践シリーズ・幼稚園編、労働旬報社。
 - ・宍戸洋子・勅使千鶴（2001）『子どもたちの四季—育ちあう三年間の保育』ひとなる子どもライブ⑤、ひとなる書房。
 - ・宍戸健夫（2001）『保育実践をひらいた50年』草土文化社。
 - ・清水凡生編（1997）『小児保健』北大路書房。
 - ・高杉自子・有賀和子（2002）『保育方法論』演習保育講座4、光生館。
 - ・竹中哲夫・長谷川真人・浅倉恵一・喜多一憲・全国児童養護問題研究会編（2002）『子ども虐待と援助—児童福祉施設・児童相談所のとりのくみ』ミネルヴァ書房。
 - ・高野 陽・全国保育園保健婦看護婦連絡会編（1993）『健康保育ハンドブック』ミネルヴァ書房。
 - ・田中享胤・三宅茂夫（2006）『保育の基礎理論』MINERVA保育実践学講座1、ミネルヴァ書房。
 - ・民秋 言・穂丸武臣（2008）『保育内容・健康』保育の内容・方法を知る、北大路書房。
 - ・全国社会福祉協議会編（2008）『新保育所保育指針を読む〔解説・資料・実践〕』全国社会福祉協議会。